

はじめに

人々の情報探索行動において、ウェブ情報の利用が主流となっている現在、図書館が行う情報リテラシー教育も新たな魅力を備える必要がある。

本稿では、学習というコンテキストの中で逆問題的手法により教授過程を見直し、レポート作成を起点とした情報リテラシー教育を実践した試みについて報告する。

さらに、学習を支えるための情報リテラシー教育のデザインについて考察するとともに、レポート作成法を中心とした基礎教育の実践のための事例および実践にあたってのポイントを示すことで、それぞれの図書館での今後の情報リテラシー教育の企画・検討に資することとしたい。

1. 学習というコンテキストの中での見直し

1.1 情報リテラシーのプロセス

「情報リテラシー」には様々な定義付けがあるが、北米大学図書館協会（ACRL：Association of College and Research Libraries）では次のように定義している。「情報リテラシーとは、情報の必要性を判断し、アクセスし、評価し、効果的に利用することができる能力のことである」¹⁾ このプロセスを図示し、実際の情報利用行動と対比させると、次のようになる。

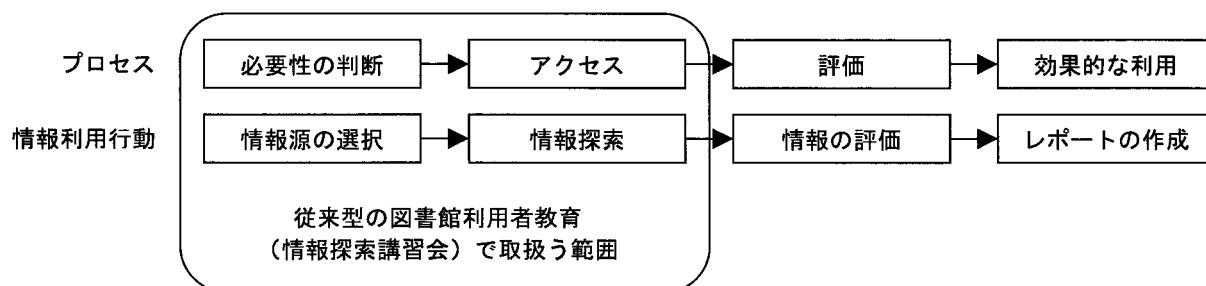


図1 情報リテラシーのプロセスと実際の情報利用行動

従来型の図書館利用者教育で中心的な役割を果たしていたのは、「情報探索（検索）講習会」である。その取扱う範囲は「情報源の選択」と「情報源の探索」の部分であり、多くの場合はまずそこから順をおって説明しているのではないだろうか。

しかし、このような情報探索中心の講習会単独で、受講者数を増加させることは困難な状況になってきている。また基礎科目などの中のコマに組み込む形をとったにせよ、学生の意欲と興味が低いために、情報リテラシー教育の効果が高まらないという問題がでてきている。今や、講習会の集客力を上げ、受講者の意欲と興味を高めるための有効な方策を考える必要があるのではないだろうか。

1.2 逆問題的手法による教授過程の改善

このような状況の中で筆者は、結果から要因を導くという逆問題的手法で講習会を再編成することが有効と考え、現場での実践に着手した。

逆問題とは、順問題に相対する概念である。かけ算の順問題は「2つの数が与えられたうえで、その積を求める問題である。これに対応する逆問題は1つの数が与えられたときにそれを2つの数の積として表すことである」。²⁾ この発想法を適用すると、とるべき情報利用行動を順にたどるのではなく、学生が目標とする到達点（よいレポート）を先に示し、次にその目標の実現方法として、適切な情報評価と適切な情報探索を教授することになる。情報リテラシープロセスを逆順にたどり、情報探索の必要性を理解させるのである。この教授過程を図示すると、次のようになる。

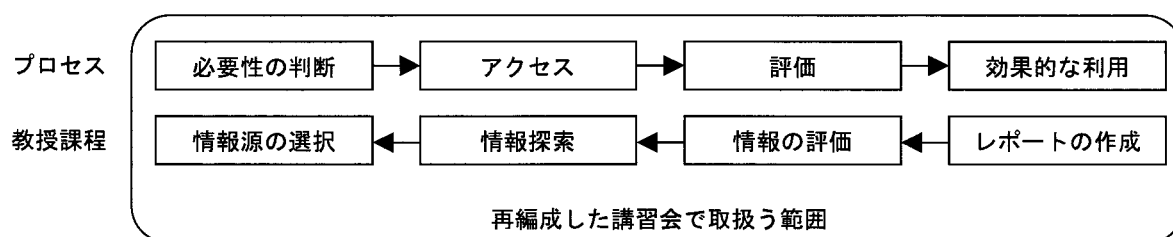


図2 逆問題的手法による教授過程の改善

学習におけるレポート作成の重要性については、大多数の学生が経験的に十分認識している。講習会ではまず始めに、上手なレポートとはどのようなものであるかを示す。次いで、上手なレポートを作成するには、どのような手順でどのような学習を行う必要があるかを説明する。様々な情報を探索し、それを素材として参照・引用しながら、自分の意見を陳述するのが大学生のレポートであることを、ここで理解させるのである。

さらに、素材として利用する情報としては、検索エンジンから無料で入手できるウェブ情報もあるが、それ以上に有用な有料ウェブ情報資源や、ウェブでは利用できない図書館情報資源が多数存在することを説明する。そして、大学生としての学習や研究を進めるためには、それらを効率的かつ適切に利用する知識と技術を身につけなければならないことを示すのである。

ここまでの説明で多くの学生は、図書館資料を活用するための情報探索や情報源の選択が、学習上非常に重要であることに、十分理解を示す。そのため、その次の段階の情報探索の具体的説明には、大きな意欲と関心をもって臨むことができるのである。利用者の「図書館への方向づけ」を高めるために、これは有効な手法であると考えている。

情報リテラシー教育は、学習というコンテキストの中で、すなわち情報リテラシーのプロセス全体を視野に入れて編成する必要がある。この視点での授業科目については、既に大阪女学院短期大学の丸本氏らが実践・報告しているところである。³⁾

2. レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の実践

2.1 「理工系学生のための講習会」の企画と構成

筆者が所属していた東北大学附属図書館工学分館（以下「工学分館」）では、2005年10月か

ら自由参加形式「理工系学生のための講習会」を企画し、実施することとした。当初からこの講習会は、「上手なレポートの作り方」と「上手な文献の探し方」の2部構成として企画し、レポートの作成法を講習会の前段に位置づけたところが特色である。開催時間は試行錯誤した結果、最も参加率の高い5時限目（16時20分～）の時間帯に定着しつつある。

「上手なレポートの作り方」の説明は以下のような構成で、説明時間は40分となっている。

- ・レポートの種類
- ・レポート作成の手順
- ・文献の利用法
- ・レポートの基本構成
- ・本論の書き方
- ・参考文献などの書き方
- ・序論の書き方
- ・実験レポート作成のコツ
- ・文章の改善例
- ・参考文献

また、「上手な文献の探し方」の説明は以下のような構成で、説明と実習あわせて50分の内容となっている。

- ・ウェブ情報と図書館情報
- ・文献の種類
- ・図書の探し方
- ・雑誌論文の探し方
- ・キーワードによる文献の探し方（途中から中止）
- ・MyLibraryの機能（途中から追加）

2.2 実施状況

2005年度は試行的に実施し、2006年度は新学期から本格的に実施した。2006年度は合計22回開催し、100名の参加者があった。回数の内訳は4月と5月に5回、6月に3回、10月に4回、11月に3回、1月に2回となっている。

講習会の実施は、2005年度は工学分館の職員3名で、2006年度は6名の体制で実施している。運用担当だけでなく、管理係と整理・運用係の職員がローテーションで分担している。

講習内容は、実施する中で受講者の要望などを取り入れながら改善している。具体的には、理工系学生にとって重要な課題である実験レポートについての説明を取り入れたこと、文献の探し方について、講義だけでなく実習も取り入れたことなどである。実習については、他の業務用に購入したノートパソコン4台に無線LANを装備し、比較的安価に実習環境を実現することができた。

受講者が少人数であることが多いので、講習会ではなるべく学生と対話するように心がけている。前記の改善も、その対話の中から生まれたものである。⁴⁾

2.3 内容的な工夫

「上手なレポートの作り方」では、レポート作成における情報探索の重要性と、レポート作成のポイントを強調して説明している。受講者の反応やアンケート結果を見ながら、内容的な工夫を重ねたものである。説明上の主なポイントを次に示す。⁵⁾

- ・ 伝達すべき内容（調査した情報と考察）が伴わなければ、レポートの質は望めない
- ・ 検索エンジンで探したウェブ情報だけでは、評価は低い
- ・ レポートに利用できる素材（文献）を見つけることが成功の秘訣
- ・ レポートは、形式にのっとり整った構成で書くことが重要
- ・ いきなり序論から書き始めず、全体の構成（アウトライン）を整理するのがコツ
- ・ 事実は客観的文章で、意見は主観的文章で書き、自他を区別して明晰に書く
- ・ 最後に、著者の問題意識と本論の意図が伝わる序論を書く

3. 学習を支える情報リテラシー教育のデザイン

3.1 マーケット・セグメンテーションの視点でのデザイン

学習を支える情報リテラシー教育内容を考える場合、大学での教育プログラムが①導入教育、②基礎教育、③専門教育のように段階的になっているのと同様に、利用者（学生）をグループ化（セグメント化）し、マーケット・セグメンテーションの視点でカリキュラムをデザインする必要がある。

具体的には、次のような段階的情報リテラシー教育が考えられる。

- (1) 新入生向け： 図書館の印象づけと図書館情報資源の有用性の理解を中心とした導入教育
- (2) 1・2年生向け： レポート作成法を中心とした基礎教育
- (3) 3・4年生向け： 分野毎の情報資源及び探索ツールの知識・活用法を中心とした専門教育

多くの図書館では、(1)の導入教育を図書館オリエンテーション／ガイダンスという形で、(3)の専門教育をデータベース講習会という形で実施しており、それなりの実績と経験があるといっ

てよい。

3.2 レポート作成法を中心とした基礎教育の事例

一方、(2)の基礎教育に関しては、いくつかの実践事例があるものの、大学図書館が積極的に関与している状況にはない。実はこの基礎教育こそ、大学での学習を支えるために最も重要なコア・リテラシーとなるものであり、大学という高等教育機関の教育の根幹となる。レポート作成を中心とした情報リテラシー教育は、大学が重点的に取り組むべき基礎教育のひとつであり、この基礎教育が効果的に行われることにより、それ以降の専門教育での成果が一層高まるのである。

例えば国際基督教大学では、新入時から2年間の英語教育課程 ELP (English Learning Program) の中で、全クラスに対して図書館資料の探し方のオリエンテーションを行っている。図書館でのオリエンテーションでは、2人1組で資料を使った調べものをさせるグループワークを取り入れるなど、図書館内ならではの効果的なインストラクションを行っている。

さらに、英語のリーディングとライティングスキルを習得させるこの課程では、図書館員がテーマ・ライティングを行うための英語文献の探し方のインストラクションを行っている。文献探索

を論文作成という学習のコンテキストの中に位置づけて、図書館員が教員とコラボレート（連携）している好事例となっている。

大阪市立大学では、導入教育「1 回生セミナー」でレポート作成法を中心とした少人数教育を行っている。半年の授業のカリキュラム内容は担当教員に任されているが、多くのクラスで図書館利用法・情報探索法のインストラクションを行っている。インストラクションは、学術情報総合センター（図書館）の会場で同センターの図書館職員が行っている。2006 年度は約 10 クラスでの実施であるが、現在全新入生への実施体制を検討中である。⁶⁾

これらの事例はいずれも、実際に何らかのテーマに関する内容のレポート完成を目標としている点に特徴がある。課題を解決するために、どのような情報源を利用したか（情報探索法）を提示させるにとどまることなく、実際に情報を整理して（情報整理法）、それを適切に文章化したレポートを作成させる（情報表現法）までのインストラクションを行うことにより、学生の基本的な学習能力を高めるものとなっている。

3.3 レポート作成の意味

一連の情報リテラシーを体系的に教授するためには、レポート作成法の教授とレポート作成の実践を通じた教育が最も有効である。なぜならば、レポート作成の過程において上記情報リテラシーの活用は必須であり、レポート作成の実践を通じてのみ情報リテラシーの効果的習得が可能となるからである。

情報の表現法としてはプレゼンテーションなどの形式もあるが、学習・研究の最も基礎的な成果表現法として、レポート作成法の習得を優先すべきであろう。レポート作成という課題は、問題を見だし、調べ学習を行い、文章化して伝達するという、学問における研究方式の基礎となるスキルを育てるものなのである。

4. さまざまな形の利用者支援の実践

上記のようなレポート作成法を中心とした授業科目では、教員と図書館員のコラボレーションが進展しつつある。授業での連携というかたち以外にも、図書館が単独もしくはコラボレートして、情報リテラシー全般を意識した利用者支援を行っている。

4.1 利用者マニュアルの作成

利用者マニュアルの作成にあたっては、レポート作成という学習の全体像を前提とした記述内容を考える必要がある。情報探索は、レポート作成のための情報収集活動として重要なプロセスと位置づけることが重要である。

慶應義塾大学の自習用 e ラーニング教材 KITIE は、情報リテラシー全般をターゲットとした教材として有用である。⁷⁾ また『東北大学生のための情報探索の基礎知識. 基本編』なども、レポート作成過程を意識した記述内容となっており、レポート作成法の授業の教材としても活用できる内容となっている。⁸⁾⁹⁾

慶應義塾大学の授業の成果として出版された『アカデミック・スキルズ』は、大学における基礎的な学習法を網羅的に説明しており、現時点ではもっとも優れた内容の学習法のテキストとなっている。巻末に付された「レポート書式の手引き」も非常に有用である。¹⁰⁾

4.2 講習会の実践

図書館の利用者講習会は、情報探索法の領域を超えた情報選択法や情報表現法のスキルを取り込むことで、魅力的な内容となりうることは、2章で報告した通りである。このような講習会を継続的に実施しつつ、その活動を学内に積極的にアピールすることが、教員と図書館員が協働する科目の実現など、新たなコラボレーションを生み出すのである。¹¹⁾

4.3 授業の実践

図書館講習会の継続的な実践により専門的な技量と知識を向上させ、その活動が評価されて教員を務めるケースもある。図書館ガイダンスでの実績を積み重ねることで、大学の導入科目・基礎科目を担当する教員（非常勤）となった横浜市立大学の図書館員は、その格好のモデルであろう。図書館ガイダンスでの情報リテラシー教育の実績を評価され、情報リテラシー教育の補助者などを経て、現在3名の図書館員が授業を担当しているという。¹²⁾

従来から多くの現職図書館員が、私立大学などでの図書館学の教員を担当している状況からみても、大学の基礎科目として位置付けるべき情報リテラシー教育の領域で、図書館員が大きな役割を果たせることがわかる。この領域で専門的な技量と知識があれば、基礎科目以後の専門科目であっても、レポート作成の実践を通じた情報リテラシー教育は十分可能となる。¹³⁾

4.4 実践上のポイント

ウェブ主流時代の情報リテラシー教育では、検索エンジンとウェブ情報源の適切な位置づけを行い、それぞれのスキル要素の指導を行うことがとりわけ重要である。アクセシビリティの高い検索エンジンとウェブ情報源は、実は信頼性に問題がある。そのことを認識せずウェブ情報源に頼りがちな傾向を低減するため、図書館資料が情報源として重要であることを知らせる図書館員の役割は一層増大している。¹⁴⁾

具体的には、学習情報資源に関する次のような基礎知識をもって利用者指導を行う必要がある。図書館員は、情報に関するこれらの基礎知識を、利用マニュアルや図書館講習会、授業の一部などさまざまな場面で伝えることにより、学習支援を行うことができる。

- (1) 学習・研究を進める上では、検索エンジンとウェブ情報資源ではなく、図書館が提供している情報資源を利用しなくてはならない
- (2) 図書館が提供する多様な情報源を知り、それぞれの利用法を理解する必要がある
- (3) ウェブ情報資源は情報の手がかりとして利用するには有効だが、図書館が提供している他の情報資源で情報の信頼性・正確性を確認する必要がある
- (4) 単一の情報源だけではなく、複数の情報源から多面的に情報を収集し、それらを比較しつつ利用する必要がある
- (5) 情報を利用する場合は、その出典を明確に示すとともに、他者の意見と自分の意見とを明確に区別して記述する必要がある

さいごに

今や大学生の情報利用行動において、検索エンジンとウェブ情報は大きな位置を占めている。大学の教育に関わる教職員は、この現実をふまえて学生の学習指導を行う必要がある。そしてわ

れわれ図書館員は、このような状況をそれぞれの大学の共通認識とするために、何らかの役割を果たさなくてはならない。

図書館単独で、全学的な情報リテラシー教育を実施することは困難である。特に、レポート作成法を中心とした基礎教育は、やはり教員が主体となり、図書館員とのコラボレーション（連携作業）で実施するのが現実的である。

そのためには、情報リテラシー教育の重要性を教員と図書館員が共有する必要がある。そしてその共通認識をえるためには、教員からの働きかけを待つだけでなく、図書館側でも基礎教育的な内容の教材作成や講習会実施などを行い、それらの活動を積極的に提示することが重要となるであろう。¹⁴⁾

※ 本稿は、参照・引用文献 4) に示した文献での論旨を基調とし、「今後の『大学像』の在り方に関する調査研究（図書館）」での知見を踏まえて、大幅な加筆・訂正を加えたものである。

基本文献

本稿で提示した論点の背景となる、情報リテラシー教育の全体像を理解するには、以下の文献が有益である。

- ・野末俊比古. "大学図書館と情報リテラシー教育". 変わりゆく大学図書館. 勁草書房, 2005, p.43-57.
- ・野末俊比古. "情報リテラシー教育". 図書館・情報学研究入門. 勁草書房, 2005, p.62-63.
- ・日本図書館協会図書館利用教育委員会編. 図書館利用教育ハンドブック. 大学図書館版. 日本図書館協会, 2003, 209p.
- ・丸本郁子ほか. 大学図書館の利用者教育. 東京, 日本図書館協会, 1989, 256p.

また、本稿の論旨確定後に参照した以下の文献も有用である。とりわけ酒井氏の文献は、筆者の考え方とスタンスを同じくするものである。豊富な具体例とともに実践的指針が示されており、現時点で最も優れたレポート作成本となっている。

- ・日本図書館協会. 情報の達人（ビデオ3巻）. 紀伊國屋書店, 2007
- ・酒井聡樹. これからレポート・卒論を書く若者のために. 共立出版, 2007, 225p.

参照・引用文献

- 1) ACRL, Information literacy competency standards for higher education, 2000（インターネット）, 入手先<<http://www.ala.org/ala/acrl/acrlstandards/informationliteracycompetency.htm>>（参照 2007-5-1）
- 2) C. W.グロエッチュ. はじめての逆問題. 臨時別冊・数理科学 SGC ライブラリ, p.15, 2002
- 3) 丸本郁子. 情報リテラシー教育の評価：大学基礎教科目として何が出来るか. 大阪女学院短期大学紀要, 30, pp.31-54, 2000
- 4) この講習会の成果評価については、下記の文献を参照。

- 米澤誠. レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の試み. 医学図書館, 54(2), 2007 (掲載予定)
- 5) 米澤誠. 上手なレポートの作り方. 人社系版および理工系版 (インターネット) 入手先 <<http://book.geocities.jp/bpxdx655/literacy.html>> (参照 2007-5-1)
 - 6) 井上浩一. 2004年度1回生セミナー:「レポート作成法」. 大阪市立大学大学教育. 2(1), pp.25-32, 2005
 - 7) 慶應義塾大学日吉メディアセンター. KITIE : Keio Interactive tutorial on information education, (インターネット) 入手先<<http://project.lib.keio.ac.jp/kitie/>> (参照 2007-5-1)
 - 8) 東北大学附属図書館. 東北大学生のための情報探査の基礎知識. 基本編 2006. 仙台:東北大学附属図書館, 2006 (インターネット) <http://www.library.tohoku.ac.jp/mylibrary/tutorial/> (参照 2007-5-1)
 - 9) 東北大学附属図書館工学分館. 図書館のすすめ: 大学図書館を活用するための13章. 仙台: 東北大学附属図書館工学分館, 2007 (インターネット) <http://book.geocities.jp/bpxdx655/literacy.html> (参照 2007-5-1)
 - 10) 佐藤望編著. アカデミック・スキルズ. 慶應義塾大学出版会, 2006
 - 11) 米澤誠. 検索エンジン主流時代だからこそ必要な図書館利用者教育. 東北大学附属図書館報: 木這子. 30(4), p.22-25, 2006 (インターネット), 入手先<<http://www.library.tohoku.ac.jp/kiboko/kiboko.html>> (参照 2007-5-1)
 - 12) 高橋克明. 司書の専門性と司書の安定的配置. 図書館雑誌. 100(10), pp.707-705, 2006
 - 13) 米澤誠. e ラーニングでのレポート作成授業の実践と成果評価. 東北大学高等教育センター 紀要. 2, pp.237-243, 2007
 - 14) 米澤誠. ウェブ主流時代における情報リテラシー教育再構築の試み. 薬学図書館, 58(3), pp.193-197, 2006
 - 15) 米澤誠. 検索エンジンを正しく使うための8原則. 曙光: 東北大学全学教育広報. 22, pp.15-17, 2006